

谷上古墳群 I

— 谷上古墳群A群 第3・4次調査報告 —

2012

福岡市教育委員会



たに じょう
谷上古墳群 I

—谷上古墳群A群 第3・4次調査報告—



2012

福岡市教育委員会



図1 調査地遠景(南から)



図2 調査地遠景(東から)

序

福岡市の西部に位置する今宿平野を見下ろす山の麓には、400基ほどの古墳が群を成して残されています。また、歴代築かれた前方後円墳がよく保存されており、平成16年には「史跡 今宿古墳群」として一括指定されるに至りました。

しかし、群集墳の保存についてはこれから課題として残されています。そこで、福岡市教育委員会では、その内容について確認することとし、平成20年度から3年間をかけ、確認調査を実施しました。本書はその成果を報告するものです。この成果が、当地域の古墳群保存の基礎資料となるとともに、市民の皆様に貴重な文化財が身近な存在であることを実感して頂くための資料として活用頂ければ幸いです。

平成24年3月16日

福岡市教育委員会
教育長 酒井 龍彦

はじめに

- 1 本書は、2009（平成21）年度および2010（平成22）年度、福岡市教育委員会が国庫補助を受け、今宿地区古墳群について実施した確認調査のうち、谷上古墳群関係調査の報告である。
- 2 調査は下記の通り、実施した。
 - 谷上古墳群第3次調査（谷上古墳群A群11号墳 調査番号0941）
 - 谷上古墳群第4次調査（谷上古墳群A群7・8号墳 調査番号1041）
- 3 本調査は、教育委員会埋蔵文化財第2課（埋蔵文化財課）が担当した。調査に際し、地権者各位においては測量のための立入りと、発掘調査について快く承諾を頂いた。この場で深く感謝申し上げます。
- 5 調査は、第3次調査を菅波正人、第4次調査を杉山富雄が担当した。本書の編集は杉山が行い、各担当が執筆した。
- 6 調査記録は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵管理し、利用に供する予定である。

凡例

- 1 位置の表記は、現用の文化財分布地図・埋蔵文化財包蔵地管理システムとの整合性を考慮し、日本測地系に基づく座標値で示した。
- 2 本書で用いる方位は、国土座標の座標北であり、真北から0°19'西偏している。なお、図6は磁北で示し、真北から6°20'西偏している。

遺跡名	谷上古墳群(A群)	調査次数	3次	調査略号	TNK-A-3
調査番号	0941	分布地図	113(今宿)	遺跡登録番号	646
調査面積		調査期間	平成22(2010)年3月16～3月30日		
調査地	福岡市西区今宿町字谷上 500-1				
遺跡名	谷上古墳群(A群)	調査次数	4次	調査略号	TNK-A-4
調査番号	1041	分布地図	113(今宿)	遺跡登録番号	646
調査面積	49m ²	調査期間	平成23(2011)年2月15～3月25日		
調査地	福岡市西区今宿上ノ原字イヤソノ796-1、今宿町字谷上 497-1				

[本文目次]

前言 凡例

I 谷上古墳群第3次・第4次調査の概要	
1. 調査に至る経緯	1
2. 古墳群の立地と既往の調査	1
(1) 谷上古墳群の立地	
(2) 既往の調査	
3. 調査の実施	1
II 谷上古墳群第3次調査の報告	
1. 調査の記録	3
(1)はじめに	
(2)調査の経過	
(3)検出した遺構と遺物	
(4)小結	
III 谷上古墳群第4次調査の報告～谷上古墳群A群7号墳・8号墳の調査～	
1. 調査の経緯	7
2. 谷上古墳群A群8号墳の調査	8
(1) 墳丘の調査	8
(2) 石室の調査	16
(3) 出土遺物	18
3. 谷上古墳群A群7号墳の調査	19
4. 小結	20

[図目次]

図1 調査地遠景(南から)	卷頭図版
図2 調査地遠景(東から)	卷頭図版
図3 谷上古墳群第3・4次調査地点の位置 (1:50,000)	viii
図4 谷上古墳群 (1:2,500)	2
図5 谷上古墳群A群11号墳周辺地形図 (1/1000)	4
図6 谷上古墳群A群11号墳現況測量図 (1/200)	4
図7 谷上古墳群A群11号墳調査前(南から)	5
図8 谷上古墳群A群11号墳墳丘現況(南から)	5
図9 谷上古墳群A群11号墳石室現況(西から)	6
図10 谷上古墳群A群11号墳墳丘現況(西から)	6
図11 谷上古墳群第4次地点現況地形 (1:200)	7
図12 谷上古墳群A群8号墳調査区 (1:200)	8
図13 3区 (1:40)	9
図14 4区 (1:40)	10
図15 5区 (1:40)	11
図16 6区土層断面 (1:40)	12
図17 6区 (1:40)	13
図18 配石10 (1:40)	14
図19 配石11 (1:40)	14
図20 配石10 (北西から)	15
図21 配石11 (北東から)	15
図22 石室上面 (1:40)	16
図23 石室 (1:40)	17
図24 出土遺物 (1:2,1:3)	18
図25 7号墳 (1:40)	19
図26 8号墳断面 (1:100)	20
図27 8号墳現状 (西から)	21
図28 8号墳現状 (東から)	21
図29 3区全景 (北西から)	22
図30 4区完掘 (北から)	22
図31 5区全景 (北西から)	23

図32 6区全景・遺構9・10(南西から).....	23
図33 配石9(西から).....	24
図34 配石9(西から).....	24
図35 石室現状(南東から).....	25
図36 石室閉塞状況(北東から).....	25
図37 石室完振(北西から).....	26
図38 石室完振(南東から).....	26
図39 玄室(北東から).....	27
図40 玄室(北西から).....	27
図41 玄室(北西から).....	28
図42 玄室前壁(南東から).....	28
図43 7号墳全景.....	29
図44 7号墳石室(北から).....	29
図45 7号墳奥壁(南から).....	30
図46 7号墳石室(奥半部、西から).....	30
図35 石室現状(南東から).....	25
図36 石室閉塞状況(北東から).....	25
図37 石室完振(北西から).....	26
図38 石室完振(南東から).....	26
図39 玄室(北東から).....	27
図40 玄室(北西から).....	27
図41 玄室(北西から).....	28
図42 玄室前壁(南東から).....	28
図43 7号墳全景.....	29
図44 7号墳石室(北から).....	29
図45 7号墳奥壁(南から).....	30
図46 7号墳石室(奥半部、西から).....	30



1 谷上古墳群第3次地点
2 谷上古墳群第4次地点

図3 谷上古墳群第3・4次調査地点の位置 (1:50,000)

I 谷上古墳群第3次・第4次調査の概要

1. 調査に至る経緯

福岡市西区の南西端、今宿平野の丘陵部には、古墳時代各時期を通じ継続して前方後円墳が造営されており、その重要性から平成16(2004)年度、「史跡 今宿古墳群」として統合指定されるに至った。

一方、丘陵や山麓地に分布する群集墳については、未だ保存の手が届いていない。このような状況を受けて、2004(平成16)年度から、国庫補助により、「今宿地区古墳群詳細分布調査」として、本地域の古墳について分布調査を実施した。2007(平成19)年度からは担当主査が配置され、2008(平成20)年度から、古墳群の内容について確認調査を実施することになった。

調査は、2008(平成20)年度、飯氏古墳群(B群)について実施し、次いで2009(平成21)年度、女原古墳群(D群)および谷上古墳群(A群)、さらに、2010(平成22)年度および2011(平成23)年度の谷上古墳群(A群)へと継続した。前2地点については2010年度報告書を刊行しており、今回谷上古墳群の2地点の調査について報告する。

2. 古墳群の立地と既往の調査

(1) 谷上古墳群の立地

谷上古墳群は、山麓地から丘陵に至る標高120mから40mの高度に位置する。山麓地は痩せて勾配のある尾根が北へ向かい、それに続く丘陵部は、開析されて樹枝状に分岐する。丘陵部の尾根は広く、ながらかな勾配の部分が各所にみられる。古墳群はA群からC群までの3群に分かれている。A群はそのなかで山麓から、丘陵端部まで続く尾根を中心として分布し、現在20基を確認している。古墳は、群南北部分ではほぼ等間隔に並び、中央部の東側丘陵への分岐部ではやや密集して2群を成す。また、西側斜面にはやや離れた位置に単独で古墳が築造されている。今回報告するうち、第3次調査は西斜面に立地する単独墳、第4次調査は中央部の一群についての調査である。

B群は東側に分岐する丘陵上に立地する。その標高80mの頂部に立地する前方後円墳のほか3基を確認している。C群はそれからさらに北方へ下って分岐する丘陵端近くの一群であり、5基で構成されていたが、工事により消滅した。

(2) 既往の調査

谷上古墳群については、2度の調査が行われている。

第1次調査 谷上古墳群C群について、宅地造成工事に伴い1966(昭和41)年度実施されたものである。5基のうち、3基を調査し、残りは既に破壊消滅していた。大形の円墳を含む。内部主体は多样で横穴式石室、竪穴式石室、石棺である*。

第2次調査 谷上古墳群B群1号墳(「谷上古墳」)の確認調査として実施した。墳丘はよく保存されており、石室は上部を欠くが、羨道部は遺存していた。石室内から須恵器、玉類、鉄刀、鉄鎌、馬具が出土した**。

3. 調査の実施

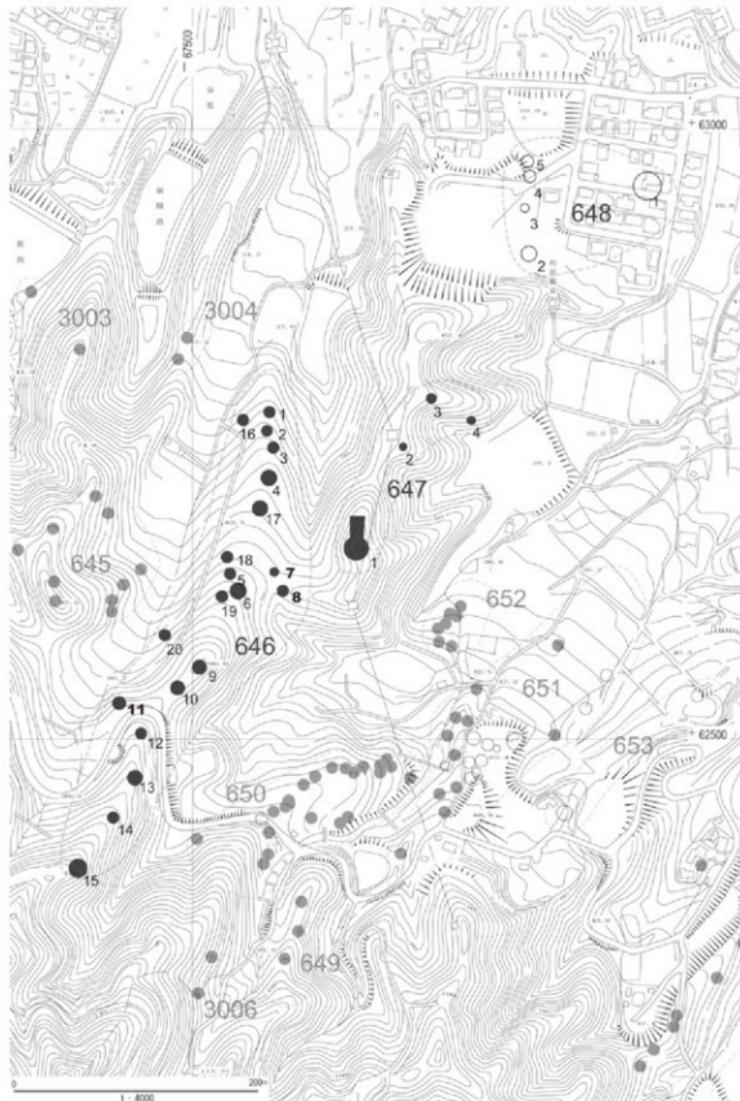
第3次調査は、A群11号墳について、2010(平成21)年3月16日から3月30日までを行い、主として現況測量を行った。

第4次調査は、A群8号墳について2011(平成22)年2月15日から3月26日までの期間で、トレンチによる確認調査を行い、併せて7号墳の現況も確認した。

以下、調査別に報告する。

* 福岡県教育委員会『今宿古墳群』福岡県文化財報告書第38集 1969

** 福岡市教育委員会『谷上古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第499集 1997



645 新開古墳群E群、646 谷上古墳群A群、647 谷上古墳群B群
 648 谷上古墳群C群、649 相原古墳群A群、650 相原古墳群B群
 651 相原古墳群C群、652 相原古墳群D群、653 相原古墳群E群
 3003 新開古墳群G群、3004 新開古墳群H群、3006 相原古墳群K群

図3 谷上古墳群第3・4次調査地点の位置 (1:50,000)

II 谷上古墳群第3次調査の報告

1. 調査の記録

(1) はじめに

第3次調査は今宿地区古墳群の保存を目的とした確認調査で、対象とした古墳は谷上古墳群A群11号である。谷上古墳群A群は5世紀後半～6世紀代の円墳15基が分布する。東側には谷上古墳群B群、相原古墳群などが分布する。そのうち、古墳群の北東側に当たる丘陵尾根上に立地する谷上B-1号墳は6世紀前半の前方後円墳で、全長約37m、後円部径20mを測る。主体部は单室両袖式型の横穴式石室で、南側に開口する。石室は擾乱されていたが、須恵器、大刀、鐵鎌などが出土した。今宿地区的古墳群は6世紀前半以降、前方後円墳は築かれるものの20～40m程度の小型のものとなり、立地も丘陵上に移動する。谷上古墳群B-1号墳や飯氏古墳群B-14号墳などが相当する。また、前方後円墳に見られる変化と並行して、丘陵部の群集墳の形成もこの時期より盛んになり、首長の在り方の変化や地域社会の再編などを窺わせる。当古墳群の形成は石室の形態などから谷上B-1号墳に先行もしくは並行すると考えられるものもあり、谷上B-1号墳との関係を含め、古墳群の形成過程が注目される。

(2) 調査の経過

今回の調査は谷上古墳群におけるB-1号墳の位置づけを考えるために、周囲の古墳群の様相を見ていくこととなった。谷上古墳群A群は標高約100mを最高位として、北側に延びる丘陵尾根線上に立地する。北側でB群が立地する丘陵と分岐する。調査を実施したA群11号墳は古墳群分布域の南側に当たる。南側は林道により丘陵が切断されている。現況はヒノキの山林で、標高は約82～88m前後を測る。調査は現況の墳丘測量を主に行った。この古墳の石室は擾乱を受け、石材が散布する状況であった。墳丘は谷頭に当たる場所で、かなりの傾斜面に立地する。

調査は平成22年3月16日から開始し、墳丘の下草刈り、墳丘測量を行った後、同年3月30日に終了した。

(3) 検出した遺構と遺物

11号墳 墳丘規模直径約9m、墳丘高は約1.5～2.0mを測る。主体部の形態は不明であるが、墳頂部には径約1～2mの大きさの陥没孔があり、床面に花崗岩の礫が遺存する。遺物は出土しなかった。

(4) 小結

今回の調査は現況の測量を主として行ったため、主体部の形態などは確認できなかった。A群は谷上B-1号墳との関係を含め、古墳群の形成過程が注目される。また、周囲の古墳群との関係でも、A群が尾根線上に一定の間隔をもって分布しているのに対して、東側に隣接する相原古墳群が斜面に密集して分布する。今宿地区古墳群では飯氏古墳群などは谷上古墳群と同様に密集する分布状況を呈しているが、一昨年度実施した女原古墳群D群などは相原古墳群と同様に密集する分布状況を呈する。500基に及ぶ群集墳の形成過程の解明にむけて、6世紀前半以降に築造される小型の前方後円墳の位置づけと群集墳との関係は今後更に調査を進める必要があると考えられる。

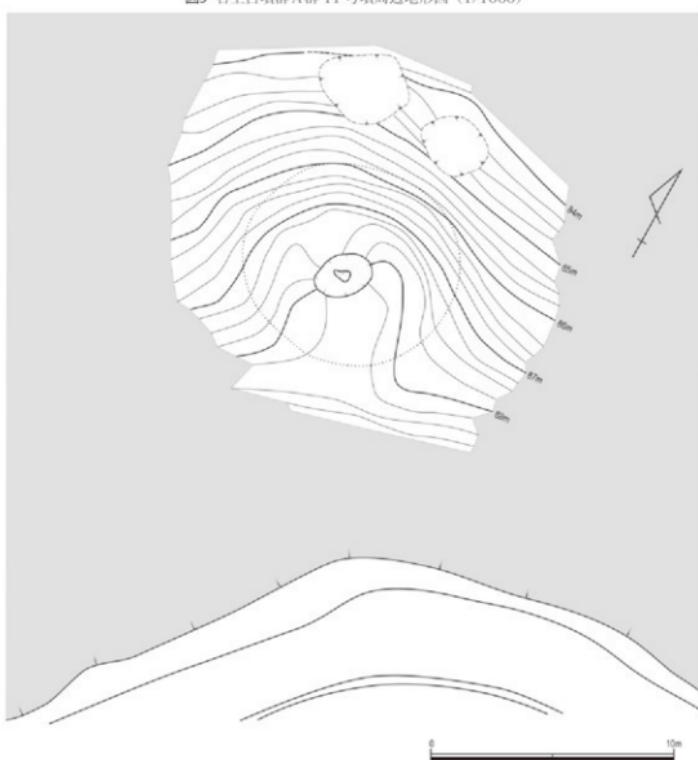




図7 谷上古墳群A群 11号墳調査前（南から）



図8 谷上古墳群A群 11号墳墳丘現況（南から）



図9 谷上古墳群A群 11号墳石室現況（西から）



図10 谷上古墳群A群 11号墳墳丘現況（西から）

III 谷上古墳群第4次調査の報告

1. 調査の経過

谷上古墳群第4次調査は、谷上A群8号墳について、石室、墳丘の調査を行った。墳丘はトレンチにより確認した。また、併せて7号墳の石室を清掃し現状を確認した。

古墳の立地 概要に述べたように両古墳は、A群の立地する尾根筋からB群の立地する東の丘陵へ分岐する位置に、1群を成している。地形は北と東から入る谷の谷頭にあたり、広がりのある尾根の鞍部となっている。8号墳は鞍部の7号墳を望む東の一段高い位置で、南の谷に寄った尾根の端

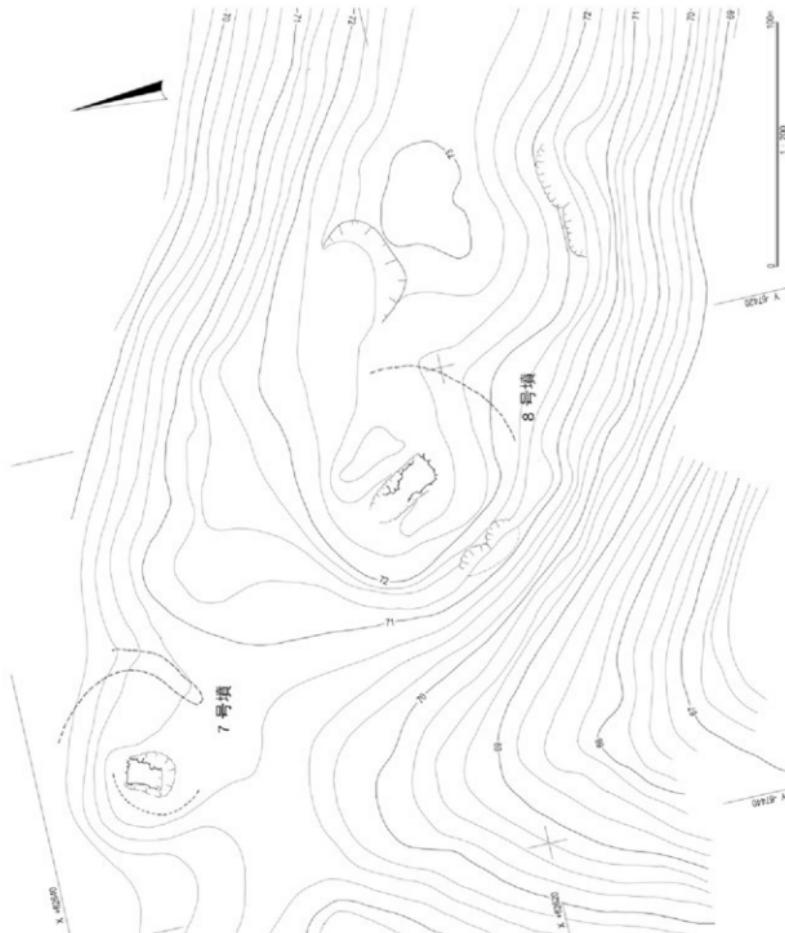


図11 谷上古墳群第4次地点現況地形 (1:200)

に立地している。現状で、墳丘は低く、後背部からみるとその高まりはごくわずかである。天井部を失って北西に開口する石室は、半ば埋没していた。7号墳は鞍部で尾根の分岐部に立地し、墳丘は低く、天井部を欠く石室は殆ど埋まり、壁の一部を確認することができるのみであった。

調査の経過 第4次調査は、2011年2月15日着手した。機材を搬入し、下草刈りの進行をまって、現況測量を進めた。測量基準点は調査地内に仮の基準点を置き、後日国土座標に取付けた。2月23日、石室の中心を基準に、石室長軸に沿う方向と、直交する方向の4方向に調査区(トレンチ)を設定し、順次掘り下げを進めた。石室内も平行して調査を行った。調査に進行にあわせ順次実測等記録を進め、3月14日から石室の実測を行った。3月23日調査区埋め戻し着手。3月25日、7号墳の現況確認のため、石室内の清掃、記録を行った。埋め戻し、機材を撤収を終わり、図根点の補測を完了したのは3月26日である。

以下、谷上古墳群A群8号、同7号墳の順に記述する。

2. 谷上古墳群A群8号墳の調査

(1) 墳丘の調査

調査区 墳丘の調査は、石室の中心を基準に、石室長軸に沿う方向と、直交する方向の4方向に調査区(トレンチ)を設定して行った。巾は1mとし、必要に応じて拡張した。調査区は石室長軸に沿い開

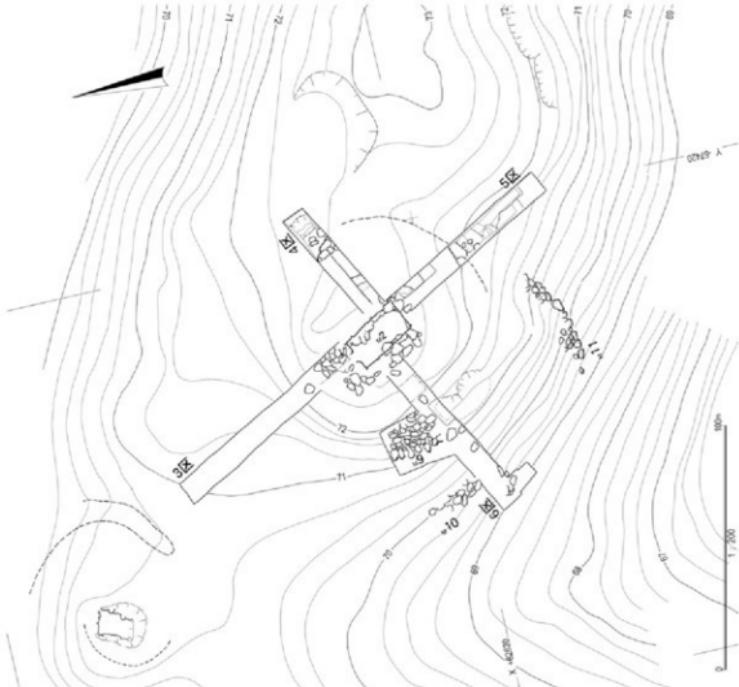


図12 谷上古墳群A群8号墳調査区(1:200)

口方向に伸びる調査区を3区とし、以下時計回りに6区までを設定した。

なお、調査区の番号は遺構番号と一緒に番号として設定した。因みに墳丘を1、石室を2、後述する各部について続く番号を付し必要な場合、記述に用いている。

以下、3区から6区まで順に報告する。

3区の調査 (図13・29)

石室前面方向、石室長軸に沿い北西方向に設定した全長約8mの調査区である。土層断面では薄い腐植土層下は赤褐色シルト層(2)となり、粗砂・細礫を含む。上部はやや明るく、下部になるに従い暗く漸移する。墳丘側ではその下位に明赤褐色シルト層(5)がみられ、少量の遺物が出土した。5下面を地山とし、墳丘遺存面とした。

出土遺物は、極細片の土師器および須恵器である。

墳丘側の堆積土は厚さ0.3m程を測る。一方トレンチ端部では、地山面が極浅く、地表から0.1m足らずの位置にある。

地表観察では石室中心から7mの位置で勾配が変化するものと見えたが、断面をみると、石室中心から5mの位置で地山面の勾配が変化する。図上では、やや窪んで溝状になるように見えるが、調査時の観察では確認できなかった。なお、この位置を現況図に当てはめてみると、調査区南側の等高線間隔の変化する位置に一致する。

4区の調査 (図14・30)

石室長軸と直交し、現況石室端部から北東方向、墳丘が丘陵尾根部につながる位置に設定した調査区である。長さは約5mである。土層断面ではトレンチの中央付近で地山が最も高く

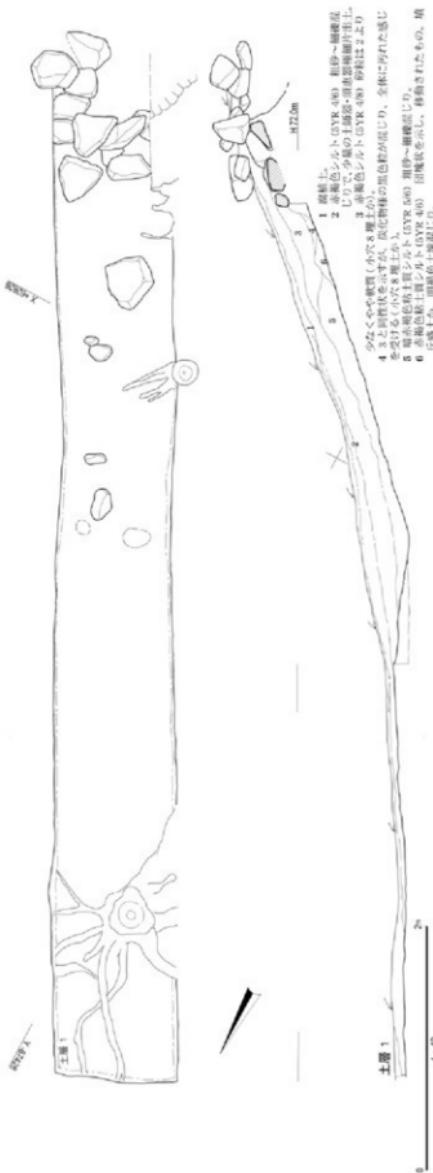


図13 3区 (1:40)

なり、墳丘内外両側に向かって傾斜する。墳丘外方へは緩く下り、調査区端で急に落ち込んで断面逆台形状の周溝となる。その墳丘側には枕大の礫を、墳丘に沿う方向で、地山直上に配列している。一部は2段に重なっており（断面A）、墳丘裾を区画するものかと考えられる。この溝を埋める土層（土層1の4・5）は赤褐色のシルト層で、上部（4）はやや粘土味が強く、花崗岩円礫が混じて出土する。下部（5）では地山起源と思われる岩片が混じる。上部でみられる花崗岩礫は円礫であり、地山起源ではなく、古墳墳丘から転落したものと見え、上述した裾部の構築物を構成していた可能性がある。

一方、石室方向では地山の勾配が急で一旦段を成したのち石室に向かって落ち込む。調査ではこの位置までを確認した。この部分の埋土は赤褐色のシルト層（土層2の8～11）で、粒径、夾雜物により分層できる。全体として塊状の状態を保ち、各層とも石室に向かい勾配をもつことから、掘削した地山上で埋め立てた状況を残しており、これが石室掘形とすることができる。掘形肩部は石室軸から2mの位置になり、上方がかなり開いた状態に掘削されている。

4区の調査では、墳丘、周溝内のいづれからも遺物の出土はなかった。

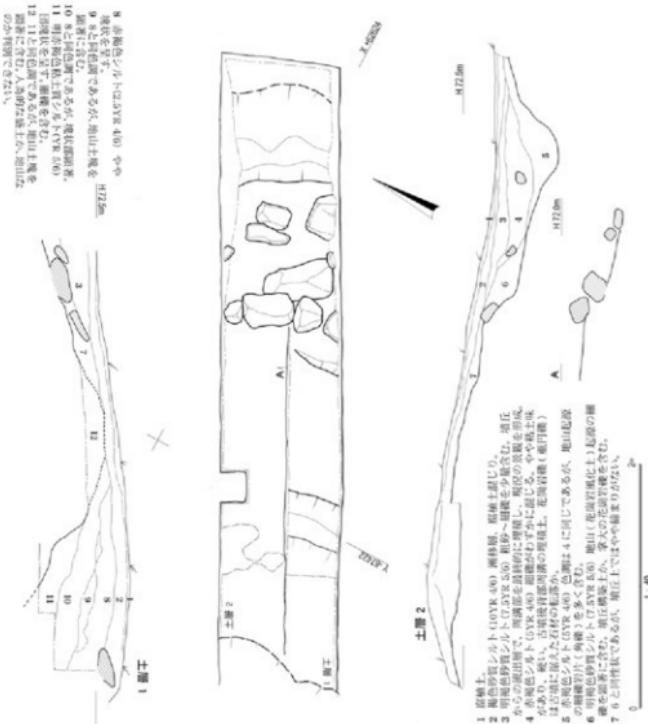


図14 4区 (1:40)

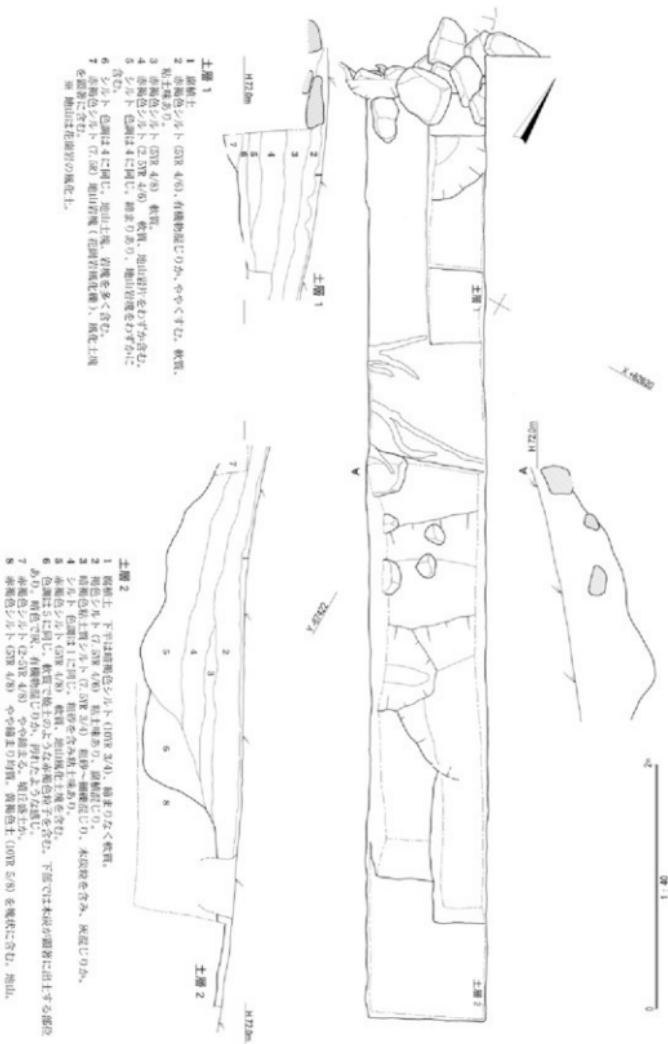


図15 5区 (1:40)

5区の調査

(図15・31)

石室長軸に沿い、石室後方、南東方向に設定した調査区である。調査区は墳丘から丘陵斜面中腹にかけての位置となり、長さ8m程の規模である。比較的急斜面にあるが、現墳頂部からは緩い勾配で下る。地山確認のため、片側を深掘りした。

表面観察では石室中心から、5m程の位置で勾配が緩くなる。表土は、3区と同様腐植土、赤褐色土と分布するが、古墳裾に向かって厚い。土層断面ではやや内側の4.5mの位置からやや急に落ち込んで、6mの位置で現地表から0.9mとなり最も深い。断面は低い逆三角形状となる。一部を後述する土壤様の落込みと重複して不明瞭であるが、現況地形と重ね合わせてみると、かなり幅広ながら、4区に続く周溝となると考えられる。溝底は標高71.2mの位置にあり、4区のそれより0.7m低い。現況地形は両者間が尾根状に高く、ここに向かい両方から高く浅くなっているものと推測できる。

土壤状の落込みは、土層断面では周溝に重複して古いものと観察したが、調査の範囲では詳細不明である。周溝の堆積層には、墳丘から転落した石材と思われる花崗岩礫も出土している。周溝の墳丘側の肩部には枕大の石材があり古墳裾に配されたの見える。同位置まで墳丘盛土分布がある。さらに石室奥壁に接した位置を深掘りしたところ、深さ0.7mの地山面まで、墳丘盛土と考えられる赤褐色土が載っていた。地山面は石室に向かって緩く傾斜し、石室近くから急に深くなる。盛土層のうち、地山面に載る層が石室に向かう勾配をもつほかは、墳丘外方へ向かって傾斜しており、墳丘構築時の状況を示している。

本調査区からは、上述した地山の落ち込みを埋める層の中位から須恵器、土師器が少数出土した。

6区の調査

(図16・17・32)

石室中心点から石室中軸線に直交する南西方向、墳丘南面斜面に設定した調査区である。調査区の長さは8m程で、墳丘頂部からの比高が3.5mあり、勾配が大きい。

調査では、表層の除去を行った後、墳丘範囲の確認のため中、上段の位置を深掘りして土層断面を確認した。また、斜面に礫が散布し、一部配列したような状態を確認したことから調査区を西側に拡張し確認を行った。その結果、配石(遺構9)を検出した。また、調査区下端近くでも配石を確認した(配石10)。

上段の土層観察深掘部(土層2)、中段のそれ(土層3)共、底面まで墳丘盛土と思われる軟質の赤褐色土で盛土されていた。土層2で1.2mを測る。上部層は全体として均質な印象で、下位層は上層よりも厚く、僅かであるが、風化岩片や別層の土塊を含ん

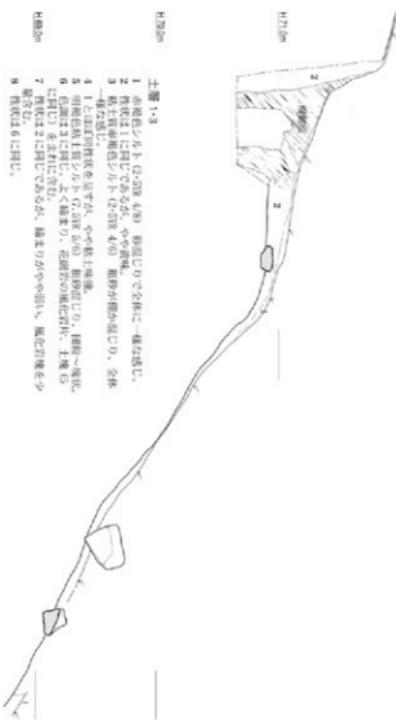


図16-6 土層断面 (1:40)

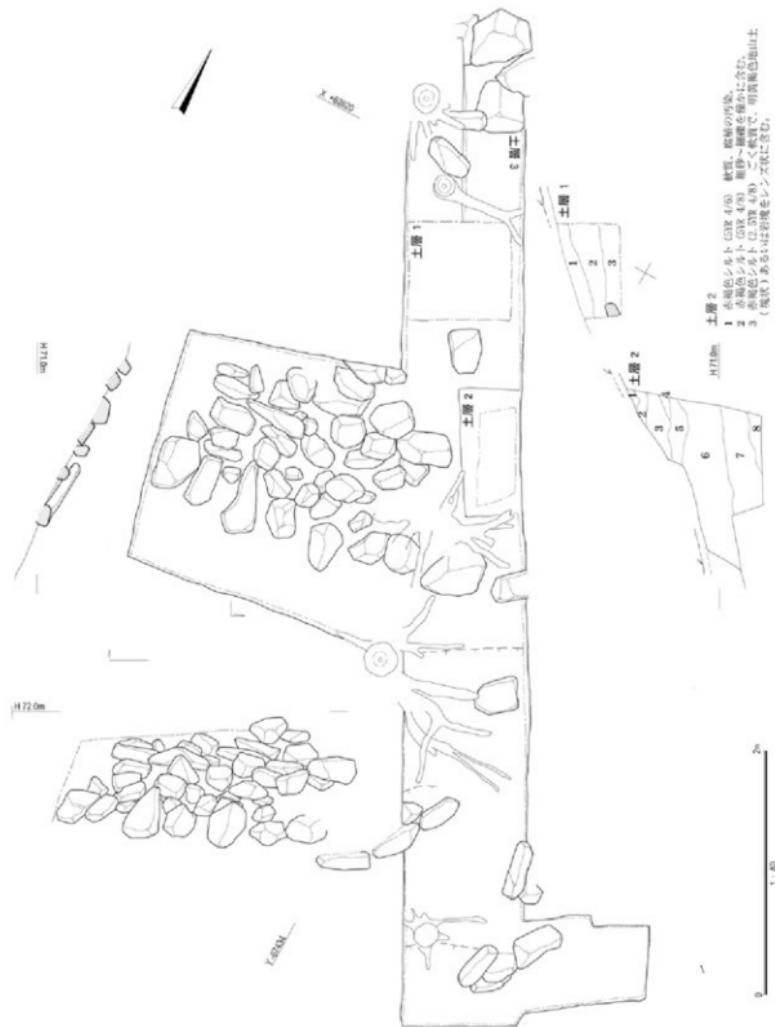


图17 6区(1:40)

であり、明らかに移動されたことを示している。

本調査区、周辺とも遺物の出土はなかった。

墳丘上施設の確認

8号墳の南面斜面には、枕大の礫が散布していた。その一部が配列したような状態で現れていたことから、ピンボールで地表下の礫を探って見たところ、一定の範囲に集中するのではないかと思われた。そこで地表に礫の配列

が見られる位置を中心に調査区を拡張、あるいは腐食土層を除去して確認を行い、3ヶ所で構築物を検出した。

配石 9

調査区6区中央部を拡張して調査を行った。墳丘斜面に枕大までの石材が敷き並べられた様な状態で配置しており、古墳裾に沿う方向の長さ3mを調査した。現地表高71mの位置で、等高線に沿うように長軸を斜面方向に向けた石材の下端位置を描えて据える。それ以上の石材は、長軸を斜面に対し直交方向に据える。全体として墳丘面に置いた状態であるが、一部は下位の石材に載せる状態で据えている。ピンボールで地表下を確認した限では、調査範囲より西へは広がらないものと見える。東方向へは3区を横断して広がる可能性がある。3区では墳頂方向への広がり認められない。なお、この遺構の下端位置は、調査区3区との間の現況等高線間隔が変化する位置によく合致する。

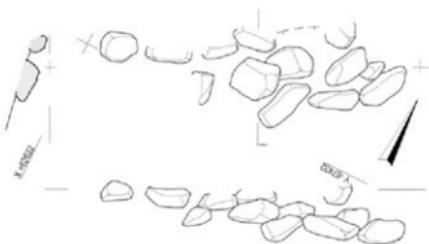


図18 配石 10 (1:40)

(図17・32~34)

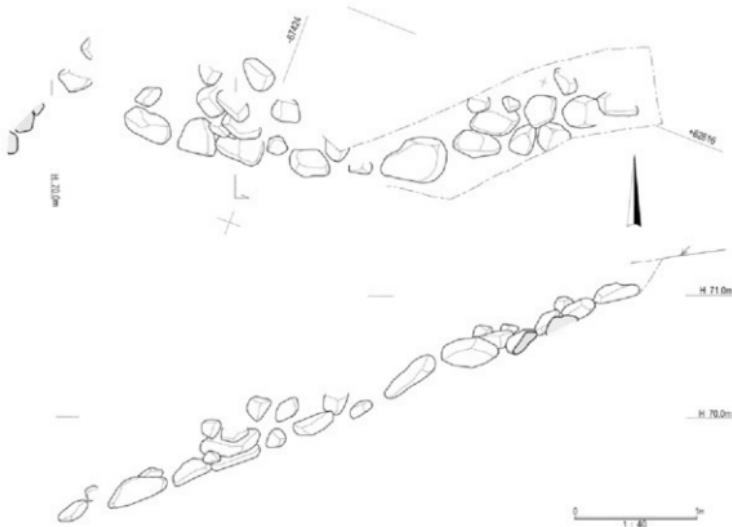


図19 配石 11 (1:40)

配石 10

(図18・20)

調査区6区の下端近くに位置する。表土の腐食土を除去し検出した。枕大の礫を標高70m の等高線に沿うように北西から南東方向に長軸を描え、直線状に配置する。上部の礫がよく揃っており、前部のそれは崩落したものかもしれない。幅1.5m程を検出した。東西方向への広がりは不明。

配石 11

(図19・21)

調査区5区と6区の間の斜面で検出し、表土を除去し検出した。枕大までの礫を傾斜方向に並べている。石材の長軸も傾斜に沿うものが多い。2.5mの長さを調査した。石材の間隔は疎である。平面では、やや弧状を成し北東から南西方向へ下る。その下部で密に組み合う部分があり、ここで等高線に沿う方向に分岐し配石10の方向へむかうとも見えるが、確認することはできなかった。



図20 配石 10 (北西から)



図21 配石 11 (北東から)

(2) 石室の調査

調査前の状況と調査の経過

概要で触れたように、石室は天井部を失い、半ば埋没した状態で遺存していた。前庭部は閉塞されていたが、閉塞石は引き分けられたように上部が石室前方に向かって傾き、両側の板石を利用した袖石はほぼ全体が現れていた。また、石室左側壁（奥壁に向かったときの）は、樹根のために押し出されたものか内側に倒れ込んだような状態にあった。

調査は石室内に流入した土砂の除去から始めた。土砂は奥壁側から流入した赤褐色シルトであるが、中程に腐植層を挟んでおり、上部は最近意図的に埋め立てされたものようである。墳丘から東の尾根上に採土の痕跡がある。このような流入土を除去し、石室内を清掃した。併行して石室前庭部の左半部分を対象とし、閉塞部を掘り下げ調査を行った。また、石室掘形の確認は墳丘調査区4区、5区で行った。

玄室 (図22・23、35~42)

石室は座標北に対し、北から28度西偏方向に開口する。玄室の現状は、高さ1.1m程が遺存し、中軸上で長さ2.5m、中央部で幅1.4mを測る。その平面形は、ごく僅かの胴張りがあり、奥壁、前壁では幅1.3mの規模である。

奥壁には、幅一杯の腰石を据える。高さは0.5m。その上に枕大に大きさで形状も揃えた花崗岩石材を3列、縦に目を揃えて積み上げる。側壁の基部は左右壁でやや異なる。右側壁では比較的長い石材5個を使用し、上位の構築材とは別とするが、左側壁では、上位の材と同規格の石材8個を使用して区分できない。両側壁とも、壁の構築材は主に枕大の厚みのある石材を用いるが、ほかにまちまちの形状、大きさのものが混じる。構築の手順は、中央から前後に向かい競り上がるよう配置されているよう見えるが、明瞭なものではない。

構築材の間は拳大の花崗岩礫で埋めるが、加えて玄武岩板石が使用されている点、特異である。図中に網掛けして示すように、かなりな数の掌大石材が、各壁に使用されている。



図22 石室上面 (1:40)

前壁は、板状の石材を利用した袖石で構成されている。左右ともに高さ0.9m、幅0.5m程の厚い板状で、右側は花崗岩であるが、左側のそれは砂岩のように見える。左側袖石は、前述のように側壁と共に押し出され、内方へ倒れかかっているように見える。袖石に接した玄室床面には、前壁を押さえるようにほぼ石室の幅一杯の大きさの石材がおかれている。水滴状ともいいうような不整な形状である。右

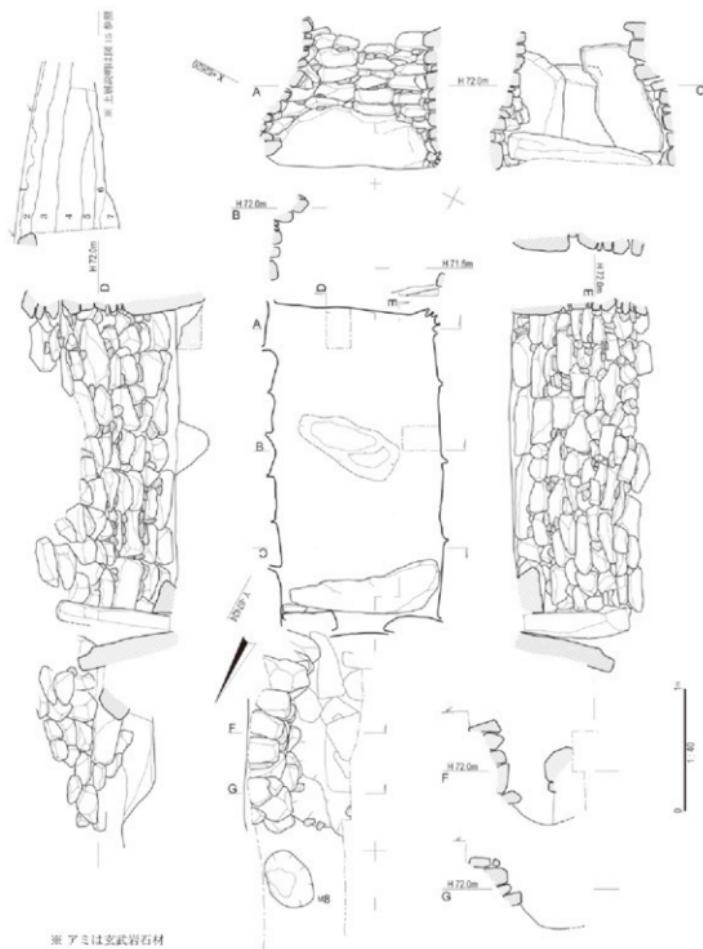


図23 石室 (1:40)

側袖石の外側縁は石室構築材の後ろに隠れ、前庭部側壁構築材との間に組み込まれているものと見える。一方、左側袖石は外側縁に接して壁構築材が見え、壁の構造に組み込まれていない。

玄室の床とするのは赤褐色のやや締まったシルト質土で、地山上塊を含んで、部分的に残る。床の現状は全体が窪んだような状態になっており、側壁の基部の一部は一段高い位置となる。中央には不整な橢円形状の擾乱がある。

石室の清掃過程で少量の円礫が出土しており、本来床面には敷石が存在したこととも考えられる。ただし、前壁前の石材はこの面に据えられている。床面の現状、前壁部の状況など、非常に不自然であり、あるいは後世、石室内を何らかの形で再利用された可能性も考えられる。床の高度は標高71.3mの位置である。

石室清掃中に、鉄器細片2点が出土した。

前庭部

(図22・23・37・38・42)

左半部のみを調査した。閉塞石の外側は、石室構築材と同形状の石材で裏込めされている。調査では、未調査部にかかる石材と樹根のため閉塞石付近を完掘することができなかった。

閉塞石は、袖石よりやや小振りの花崗岩板石を利用している。上部は前方へ倒れるが、下部は袖石に接した位置を保っている。前庭部は、墳丘から掘りくぼめ、玄室へと下る構造をとる。調査部では一段下った平坦面となった部分までを確認した。前庭部側壁は石材の小口を揃え、基底部には腰石を配置するようである。その底面の高さは玄室床面から0.3mの比高がある。しかし玄門の床面は玄室と一致し、閉塞石の底面も同じと見える。この間の構造は先に述べた事情で確認することができなかった。

前庭部からの遺物出土はなかったが、埋土中に玄室と同様玄武岩礫が僅かではあるが混じって出土した。また、前庭部前面の墳丘に、樹根痕と思われる不整な小穴(M8)があり、その埋土中から鉄壁の細片が出土している。

(3) 出土遺物

(図24)

今回調査で遺物出土のあったのは、墳丘調査区3区墳丘斜面、5区墳丘裾(周溝)、石室玄室内、前庭部前方の小穴である。内容は須恵器・土師器、鉄器、鉄壁である。いずれも細片資料であるが以下に

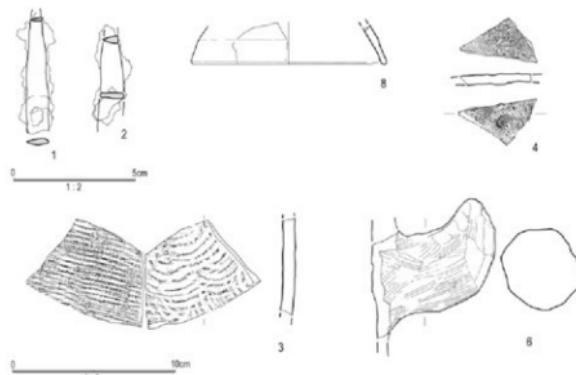


図24 出土遺物 (1:2,1:3)

図示できる遺物を示す。

1・2は玄室出土の鉄器である。共に両端を欠く。1の下部断面形は紡錘形状、上部は細い三角形となる。長さ4.8cm。2の断面形は同様長方形、三角形となる。長さ4.0cm。ともに断面形から刃物と見えるが詳細不明。

8は、須恵器壺蓋と復原した。細片資料で、口径12.1cmを復原できる。胎土はやや粒状性があり均質、内外面とも回転を利用した撫で調整を行っている。器表は灰白色(2.5Y 7/1)。3区埴丘斜面出土。4は須恵器壺蓋の頂部中央部細片と思われる。平坦で、内面には體轉整形痕を残し、外面には窪削調整の後撫で調整を行っている。胎土に粗砂粒を含み堅緻、灰色を呈す。5区周溝埋積土出土。

3は須恵器表部細片である。外面は併行叩き目調整痕が密に残る。対応する内面の当て具痕は同心円状で深く残る。断面は切粒状を呈し堅緻。器表は灰白色(2.5Y 7/1)。5区周溝埋積土中位出土。

6は土師器で把手のみの資料である。全体を細目の刷毛目調整を行った後、端部を指押えにより整形する。取付は本体に穿孔し差し込む。本体は取付部の上部で厚く、下部では極薄い。内面の調整は非常に粗い。断面で径4.9cmを測る。胎土に細繅を顕著に含み、やや軟質、器表はぶい黄褐色(10YR5/3)を呈す。5区周溝埋積土出土。

3. 谷上古墳群A群7号墳の調査

露出する石室石材の位置等からして8号墳と同種の石室ではないかと見られるようになったことから、石室内と周囲を清掃し、確認を行った。

埴丘は、現状0.5m程の高さで、標高71m弱の位置にある。8号墳を見上げて、8号墳とは1.5mの高度差がある。円墳で、測量図から径7m程の規模を推測できる。

石室は南の谷に向かい、座標北から西へ164度の方向に開口する。玄室の前半部は地表部まで埋まっているが、これが人為的なものであることは8号墳と同様である。前庭部も埋没しているが、袖石、閉塞石と思われる石材の上端が露出して、全体のおおよその形状がわかる。玄室後半部も半ば埋没し、側壁の高さ0.7mの部分が露出している。ピンボールを刺して確認したところ、埋没面から0.2mの位置に石材を確認した。

玄室は、奥壁と側壁の後半部が観察できた。石材は8号墳より大形で、奥壁の腰石も8号墳よりはるかに高いものと考えられる。玄室前壁は8号墳と同様、両袖に板石を利用して、板石で閉塞している。ここで石室規模を計測すると、長軸上の長さ2.4m、奥壁埋没面で幅1.2mを計り、8号墳とよく似た規模となる。

調査中遺物の出土はなかった。

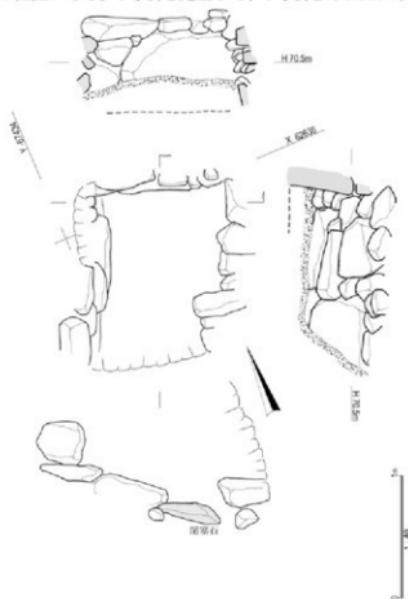


図25 7号墳 (1:40)

4. 小結

各調査区毎に記述した成果を以下にまとめる。

墳丘 墳丘の規模について。4・5区の配石の位置、6区配石9の末端位置および、3区の墳丘からの勾配の変換点は石室の中央からほぼ同じ距離にあって、石室長軸方向、交差方向で対向する間隔は約9.5m、9.8mを測りこれと現況測量図から径10m弱の規模の円墳と復原できる。また、現状の高さは4区溝底から1.0m、6区配石基底から1.7mをそれぞれ測る。

古墳の築造は、後背部を溝で区画し、墳丘裾に配石を設ける。周溝中の転落石材の出土状況からすると、部分的には積み上げられていた可能性がある。墳丘裾部の配石は6区の配石に連続するものかもしれない。周溝は、古墳前面に続かないか、あったとしてもごく浅い。周溝は馬蹄形状を成し、斜面側は大きく開いた形状を呈していたものと見える。

石室は、幅広な尾根の中央を避け、南側斜面に寄った位置を選び、斜面を壇状に掘削し床を造成する。その掘削上を主に斜面側に盛り上げ、墳丘を築造しているように見える。このため、斜面側の6区では深い位置まで盛土が続き、3・4区では盛土が殆ど残らない。5区は中間位置で、やや掘り下げた基底面上に盛土されている。このようにして造成した墳丘斜面に石材を配置し、配石9が構築される。また、下方にも石材を配列した配石10が構築されている。さらに斜面に沿って登った位置に配石11があり、これは配石10から続くものかもしれない。配石10・11を現況測量図に重ねると、墳丘から続く斜面の勾配の変換部に相当し、墳丘と一体となった施設であったものと考えられる。このようにみると、8号墳は南側谷を意識して築造されているものと考えられる。この谷筋を墓道と考えると8号墳を脇に見ながら谷頭に回り尾根に登って右手正面に石室が開口する。また、この位置の正面に7号墳が開口するという位置関係となる。

石室 長さ2.4m、幅1.4mで比較的小振りの石材を用いて構築された横穴式石室である。平面形はやや胴張り状となる。奥壁には腰石を据えるが、左側壁では石材の差は不明瞭である。石材は周辺でも採取できるやや偏平な花崗岩亜円礫を多用するが、掌大の玄武岩板石を各所に挿入している点特徴的である。玄室は前庭部から下った位置にあり、玄門部の詳細は調査できなかったが、閉塞石底辺の高さから玄門部の床高さは玄室のそれと同高となる。前壁は板石の袖石で構成され、閉塞も板石で行われる。

古墳の時期 遺物が極小量出土し、いずれも細片資料で詳細不明であるが、須恵器坏は6世紀後半の資料と思われる。

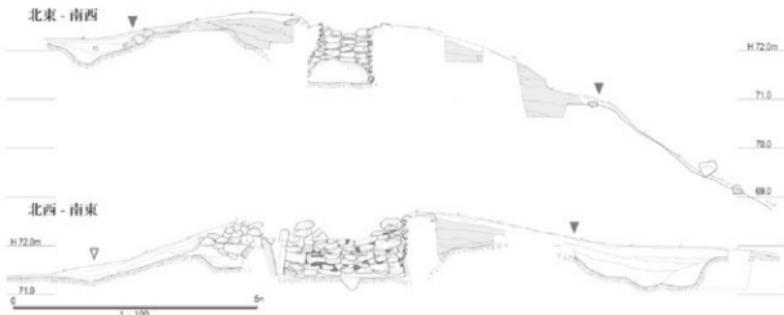


図26 8号墳断面 (1:100)



図27 8号墳現状(西から)



図28 8号墳現状(東から)



図29 3区(北西から)



図30 4区(北から)



図31 5区(北西から)



図32 6区・遺構9・10(南西から)



図33 配石9(西から)



図34 配石9(西から)



図35 石室現状(南東から)



図36 石室閉塞状況(北東から)



図37 石室完掘（北西から）



図38 石室完掘（南東から）



図39 玄室（北東から）



図40 玄室（北西から）



図41 玄室（北西から）



図42 玄室前壁（南東から）



図43 7号墳全貌



図44 7号墳石室(北から)



図45 7号墳奥壁(南から)



図46 7号墳石室(奥半部、西から)

報告書抄録

ふりがな	たにじょうこふんぐん いち						
書名	谷上古墳群 I						
雨書名							
巻次							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1139集						
編集者名	杉山萬雄						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神一丁目8番1号 TEL092-711-4667						
発行年月日	20120316						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村・遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
たにじょうこふんぐん	ふくおかんふくおかにしへいじきうち		33°33'54"	130°16'12"			
谷上古墳群 (第3次 A群11号墳)	福岡県福岡市西区今宿町	40130 646			20100316 ～ 20100330		確認調査
たにじょうこふんぐん	ふくおかんふくおかにしへいじきうち		33°33'56"	130°16'17"			
谷上古墳群 (第4次 A群7-8号墳)	福岡県福岡市西区今宿上ノ原、今宿町	40130 646			20110215 ～ 20110325	49	確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
谷上古墳群 (A群)	古墳群	古墳時代	古墳3基		土器器、須恵器		
要約	谷上古墳群A群を構成する7・8・11号墳の3基を対象として、現況測量を行い、8号墳について墳丘、主体部の発掘調査、7号墳について主体部の確認を行った。7号墳、8号墳は位置関係から1群のものとできる。墳丘、石室も同系群にあるもので、前庭部を下つて石室を設け、袖を板石とする横穴式石室である。						

たにじょう
谷上古墳群 I

— 谷上古墳群A群 第3・4次調査報告 —
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1139集

2012年3月31日

編集・発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印 刷 エース印刷株式会社

福岡市中央区大通1-6-9